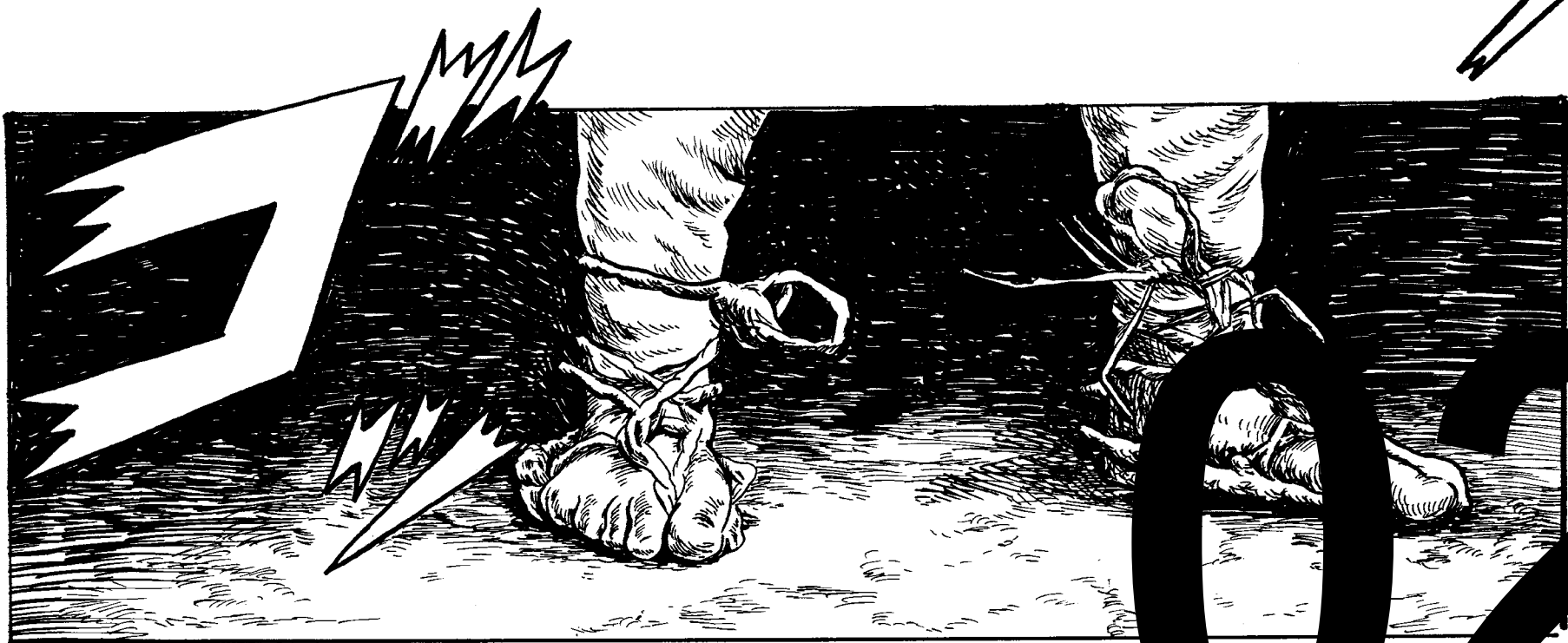




02

共異体としての ジオカルチャー

にかほ市×秋田公立美大による

「ジオカルチャー研究プロジェクト」の可能性

石倉 敏明

秋田県は東北地方の脊髄をなす奥羽山地を東に、豊かな海洋生態系と海運環境を持つ日本海を西に控えて東西に広がっている。また、北方には本州最北部に相当する青森県へ、南方は旧出羽国の部として秋田と文化的共通性も多い山形県へと連なる。山形と秋田は、関西や関東といった日本の政治的中心地からみれば同じ「出羽国」の部であった。「出羽国」とは、ちょうど鳥が羽を広げたような形をした土地、という意味である。かつての郡人たちは比較的「中央」に比し山形地方を「羽前」、遠い秋田地方を「羽後」と呼んでいたのだ。

かつて太平洋側の東北地域帯は「陸奥国」と呼ばれ、秋田・山形の「出羽国」と合わせて「奥羽」「陸羽」などと称されてきた。いまでも秋田に残る「羽後」という地名は、こうした江戸時代までの伝統的な日本地名に由来し、古くは大和朝廷の東北経営の環として、土地に名前が与えられていった名残をとどめている。しかしながら、秋田県をはじめとする北東北には「羽（別）や「ナイ（内）」といった水に関連するアイヌ語地名^{※1}がいまも多数残されている^{※2}。こうした地名はおそらく、かつて北東北の蝦夷（えまひ）が使用して

いた言語の痕跡であり、北海道の先住民族であるアイヌの文化の原型が生まれる中世以前から伝えられた、いわばプレ・アイヌ期の地名遺産である可能性もある。つまり、東北の縄文時代、統縄文時代の言語が、地名として残存している可能性も、否定するとはできないのだ。

弥生時代以後の移民によって作られた「日本」よりも古い言葉と文化が、秋田には残されている。それは旧石器時代から縄文時代にかけて形成されたこの土地の基層となる文化が、現代になまじく露頭している、興味深い光景と言えるだろう。弥生時代以後の日本は、やがて畿内や都に朝廷を置いて、各地に政治的な勢力を伸ばしていった。周知のとおり、彼らは稲作や漁労を生業の基盤とする食文化を持ち、稲や米をもっとも神聖な食物とする神話を継承しながら、天皇家を中心とする神話や、征夷大將軍を中心とする幕府の歴史を継承してきた。ところが、そうした「日本文化」が東北にたどり着くまでには数多くの抵抗と粘り強い交渉、あるいは帰順と挑戦の歴史が存在した。秋田はその意味でも、「日本的」なものと、「前日本的」なものが鋭く拮抗し、独特な緊張感を持って共存してきた土

地である、と言えよう。

この土地の源流についての歴史ではなく、拮抗するいくつもの勢力の歴史が存在してきたことは、秋田の人びとがこの土地に深くとした芸能や祭事を育んできた根拠の一つであろうと、私は思う。秋田の文化は、決して「色」ではない。仮に秋田の文化地図を描くとすれば、それは、マール状に溶け合い反発する複雑なデザインや、パチワーク状につきはきされた農村の古い着物のようなデザインになるはずだ。なぜなら、この土地には歴史の上に数多くの異なる文化、異なる来歴、異なる信仰、異なる言語をもった集団が拮抗し、干渉し、ぶつかり混ざり合ったりしながら、独特な地域性を作り上げてきたことがわかるからである。歴史学的に考えれば、秋田を含む北東北は、縄文時代の流れを汲む「統縄文文化」と西日本の影響による「弥生文化」が混在する複数文化の接触領域に当たる。秋田には、深々とした野性味を保った先住者の文化と、政治的な中心地からもたらされた洗練された文化が共存し、共に影響を与え合いながら発展してきたのである^{※3}。

異なるものが、異なるとまま共存する社会のあり方を、私は「共同体」を更新する「共異体」という視点によって捉え返し、その差異のあり方を記述するさまざまな方法を開拓したい、と考えている。その中で重要になってくるのが、人間によるさまざまな活動を取り巻く、非生命環境と、生命環境の相互作用である。これを人類学的な観点より整理すれば、第1の環境は、大地の地質・気象現象・山野河海・自然条件によって形成される「ジオ（Geo）」の次元であり、さらにジオスを基盤としその上に繰り広げられる複数種の生物的世界、すなわち「 Bios（Bio）」の次元である。ここに人間に特有な活動領域を意味する「アントロpos（Anthropos）」の次元を加えた視座によって、「ジオス・バイオス・アントロpos（GAB）」の三元構造をしめすことが可能になる。

共異体とは、すなわち地球誕生以来繰り広げられてきたジオスの歴史に、生物の発生後に生じた数多くのジオスの歴史が折り重なった非生命環境と生命環境の相互作用のもとに、比較的最近になって発生した人類の活動を加えた多次元構造による「共異集合体」であり、その根幹にあるジオスと人間の関わりを、私たちは「ジオカルチャー」という大地と人間の相互作用として、改めて探究してみたい。ジオハイク・ネットワークではこの相互作用に「ジオ・エコ・ウ」という二つの名称を与えているが、この構造は「ジオス・バイオス・アントロpos（GAB）」の三元構造と基本的な視座を共有する。ここで、ジオスを基盤とする文化現象を「ジオカ

ルチャー」と名づけ、特に島海山麓エリアというジオスの作用が社会に大きな影響を与えている地域において、複数の方法論によって人と大地の関係を紐解いて、こうとするのが「ジオカルチャー研究プロジェクト」の基本構想である。

秋田県と山形県の県境にあたる島海山麓エリアには、地学的・生態学的・人類学的な複数の絡まりあつた興味深い事象や文化が現代に継承され「人間以上（More than Human）」の豊かな広がりとして、いくつもの興味深い景観や文化現象を作り出している^{※4}。私たちは、こうしたダイナミックで混沌的な複数性の共存状況を「ジオカルチャー」という概念によって照射し、数年かけその魅力に想いをくわえたい、と志す。

秋田県にかほ市と秋田公立美大の連携による「ジオカルチャー研究プロジェクト」は、大地が織りなす数千万年規模の地質運動に始まり、その土地に生きるさまざまな生物種が生み出す極めて繊細でユークな生態系のあり方、さらには人間の活動が創り出す巨大な影響力の大きな人工環境の変遷までもを視野に入れた、異なる専門性を持つ研究者の協働によって推進されるプロジェクトである^{※5}。それは、大学という教育研究の専門機関と、大地の土に生きる人々を支える地方自治体が、単なる表層的な文化事業や利害を共有する連携事業を行うことにとどまらず、人新世と言われる現代の新たな地質年代の更新を踏まえた新たな世界観や地球観を共有しようという、壮大な研究プロジェクトであると言つても過言ではないだろう。秋田のように、さまざまな異なるルーツが共存する地であるからこそ、このような新たな研究構想が可能になると、私たちは考える。引き続き、ジオカルチャー研究プロジェクトに注目していきたい。

【石倉敏明】 1974年東京都生まれ。1997年よりダージリン、ンツキム、カトマンドウ、東北日本各地で聖者や女神信仰、「山の神」神話調査を行う。環太平洋圏の比較神話学に基づき、論者や書籍を発表。近年は秋田を拠点に北東北の文化的ルーツに根ざした芸術表現の可能性を研究する。著書に「Lexicon 現代人類学」（奥野克巳との共著、以文社）、「野生めぐり 列島神話の源流に触れる12の旅」（田附勝との共著、淡交社、2015）、「人と動物の人類学」（共著・春風社）、「タイ・レイ・タイ・リオ細記」（高木正勝CD附属神話集・エビファニーワークス）など。第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「Cosmo-Eggs 宇宙の卵」（2019）、「精神の（北）」へVol.10: かすかな共振をとらえて」（ロヴァニエミ美術館、2019）、「表現の生態系」（アーツ前橋、2019）参加。秋田公立美術大学准教授。

※1 山田秀三『東北・アイヌ語地名の研究』草風館、1993年。

※2 歴史学者の新野直吉は秋田のこうした混成状況を「斑状文化」と形容している。新野直吉「論点 あきた史」秋田魁新報社、1999年他。

※3 奥野克巳・近藤秋・ナターシャ・フライン編「モア・ザン・ヒューマン—— マルチスピーシーズ人類学と環境人文学」以文社、2021年。

※4 同様に大地と生物の関係を視野に入れた先行研究として、次の展示図録を参照した。大場秀章・西野嘉章編『動く大地とその生物（東京大学コレクションI）』財団法人東京大学出版会、1995年。

山体崩壊によって生まれる 「流れ山」のつくり方と 流れ方、歩き方

秋田公立美術大学とにかほ市は、鳥海山の山体崩壊を起源にユニークなランドスケープを形成しているにかほの地形を楽しむ、いっぽにほにかほ「ながれ散歩」を企画しました。鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会の協力を得て、仁賀保公民館むらすぎ荘を会場に実施したレクチャーとまちあるきの報告です。

山体崩壊によってつくられる 「流れ山」のレシビ

「流れ山」とは、火山が山体崩壊を起こし、膨大な量の土砂や岩石が堆積したときにできる突起した地形のこと。「東の松島、西の象潟」と称されたにかほ市の景勝地・象潟の「九十九島」は、紀元前466年に起きた鳥海山の山体崩壊によって生み出された無数の「流れ山」です。しかし象潟よりも北側に位置する金浦や仁賀保地区には実はもっと多くの「流れ山」が存在しています。各地域の特徴づける景観要素を評価し、新たな地域資源として位置づけることを目的に展開しているのが、井上宗則による流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究です。鳥海山の流れ山はどのようにしてできたのか、山体崩壊によってどのような地形を生み出したのか。2022年11月13日に実施した「いっぽにほにかほ「ながれ散歩」では、鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会の大野希氏がそれを逆算するのよう「流れ山のつくり方・流れ方」と題したレクチャーをおこないました。

2022年11月13日(日)スケジュール

レクチャー1「流れ山のつくり方・流れ方」

大野希一(一社)鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会 事務局次長兼主任研究員

レクチャー2「流れ山の資材性」

井上宗則 秋田公立美術大学景観デザイン専攻 准教授

まちあるき

茂野正信 | 鳥海山・飛鳥ジオパーク認定ガイド

仁賀保公民館出発

⇒

仁賀保神社

⇒

安楽寺

⇒

八幡神社

⇒

望海公園

⇒

仁賀保公民館解散



大野希一氏

材料は土砂のみ！ コツは、強火で一気に流すこと

大野氏はまず「流れ山のつくり方・流れ方と考えるための」ですが、よく考えたら「流れ方」ではなく「流し方」だな、と今日は流れ山の流し方のレシビについてお話できたらと思っています。材料も用意していますので、ぜひうちでやってみてください(笑)と話し始めました。「鳥海山は溶岩」というものを流すことが多い山ですが、たまにトレス発散のためか、崩れます。江戸時代の初めぐらいから約360年間で9回噴火しています。単純に割り算をすると、40年に1回です。前回の噴火が約50年前なので、そろそろなのではないかな。」と心配しつつ、ユモアを交えながらレシビ解説に移りました。

「流れ山をつくるのに必要な材料は、火山灰や溶岩などの土砂です。これを0.1から数立方キロメートル用意してください。つまり方方は簡単です。まず、たくさん噴火をさせて、これを積み上げて火山というものをつくります。時間は何十万年かけてもいいです。こうやって積み上げたあと、地下水を染み込ませて、それをグツで温めます。火加減はお好みで。早くやりたい人はちよと強火でね。臨界状態をつつたあと、地震を起こして火山をこうやって揺さぶったり、地下から熱いマグマを突っ込んだりして、ちよと刺激を与えてください。そうすると臨界状態の水蒸気が一気にツと出てきて、山が崩れます。すると、流れ山ができます。流れ山をつくるには、コツがあるんです。それは、高い所から一気に崩すこと。流れ山をつくるにはそれが大事なので、崩すときの火加減は強火がいかなと思ひます」

「流れ山」の流れ方は、 遊園地にある、あの遊具

レシビ解説が終わったところで、次は「流し方」に移ります。



「なだれを流すには、気合を入れて一気にやるのが重要です。土砂を混ぜてはいけません。混ぜずに、山の部をそのまま、温度も上げずに一気に麓まで押し流すんです。なだれが流れていくと、山の部がどんどんほくれています。が、そのほくれ残りが流れ山。このとき、水を使うと流れ山はできません。これ意外でしょう？爆発の原因には水が関わるんですけれど、流れるときには水は関わらないんです。不思議ですね」

そして、流れ山が流れるときは、いったいどんな流れ方をするのか。

「感覚的に言えば、それは遊園地にある遊具のコピーカブや、子ホッケーのバツのような動き方をします。地面と流れ山の間の摩擦抵抗がとて小さくなるのです。ちよとした斜面であっても高速で移動してしまいます」

意外な例えに行き着くレクチャーは地質学的な解説を踏まえながら、現在の景観について話が及びました。大野氏は「土地に被害を与えるかもしれない自然現象の累積が、現在、美しい景色を生んでいるという事実はとても不思議な感じがします」と話します。

「にかほの象潟岩屑なだれの規模は、日本のなかでは比較的大きなものです。流れやすい条件のもとで流れていたという特異性を、さまざまなかちで地域資源に活用できるのではないかなと思ひます。だてて、この流れ山は、象潟に比べてサイズが大きいんですから」



「流れ山」を歩き、 仁賀保の過去と現在をめぐる

レクチャー後に実施した「まちあるき」のガイドは茂野正信氏(鳥海山・飛鳥ジオパーク認定ガイド)。参加者に



はにかほ市内だけでなく秋田市、由利本荘市、山形県庄内町など遠方からの参加もあり、仁賀保の流れ山や地域資源の関心の高さがうかがえました。雨のためルートを短縮したまちあるきでしたが、仁賀保公民館を出発して仁賀保神社、八幡神社、望海公園に仁賀保の歴史と日常をめぐる、過去と現在を行き来しました。

まちあるきを前に配布した茂野氏による資料は、こ仁賀保地域の地名「平沢」の「平」の語源から始まっています。

「語源は日本古語の「ひら」であり、急斜面を意味しているとされています。仁賀保地域は紀元前466年の鳥海山の山体崩壊によってできた小丘陵(流れ山、斜面)と沢と川にうってきあがっており、そこから平沢という地名は生まれたと推察されています。平沢地区のほぼ全ての集



撮影:伊藤 靖史、後藤 洋平 ほか

いっぽにほにかほ「ながれ散歩」運営:井上宗則、石田駿太、石戸凛、友杉悠葉、長谷川由美、藤原すもも、山下暁羽

カメラを持って行ったのですが雪の上を歩くのに精一杯で、撮影することができなくて。歩いたり何かをつくったりしながらみんなが面白いことを言うので、それを盗み聞きしてスマホにメモしました。雪を磨製石器みたいに磨いていたり、林から突然出てきた人に驚いたり、山を滑っているときの会話だったり、その時々言葉を記録しました。面白いことを言っているけれど、状況は雪のなかで真面目に制作しているときのもので。でもみんな、いつもと同じような会話なんです。

雪の冬師湿原は、天気よかったせいか明るく滑らかで、そこら中にある流れ山もスケートボードパークのように連続して連なっているように見えました。滑らかな冬師湿原の起伏と、鳥海山の鋭利さのコントラストが強くて、地続きではないような、不思議な感覚がありました。夏にまた見に来たいなと、それが一番、思ったことです。

冬師湿原を、ひたすら歩きました。

撮影した動画から音だけを抜き出して、ちょっとした音楽にしてみようと小さなサンプラーを持っていきました。使いこなせずに、あまりできませんでした……。

この2日間は、別に何をしたわけでもないんです。雪を掘っている人がいたので、自分も真似をして雪を掘って入ってみました。そこからまわりを眺めてみたら、白い雪のなかに、人が小さく見えて、それぞれ、あちこち歩いているのが見えました。それを雪のなかから眺めている自分がいました。

雪の塊で水彩絵の具を溶いて、一晩、雪のなかに置いておきました。絵の具は雪で溶けるのだろうか?という実験をしていたら、溶けて、乾いて、色が画用紙に定着しました。結果的に、色でマチエールがつくられていました。

冬 雪 師 原 湿 原 に 帰 る。

2023年2月、冬師湿原でおこなった雪上フィールドワーク。
天候のコンディションや現地の地形を把握して、
雪のなかにそれぞれが「仕掛け」をつくった。
夜に気温が下がることで、前日の行動が変容し、
翌日の風景をつくっていく。
時間の経過。
即時的ではない、自然との付き合い方。
外気温によって凍結する現象には、
身近でありながら、普遍的な驚きと不思議さがあった。

簡単なものなのですが、スマートフォンのコマ撮りアプリを使ってコマ撮りアニメーションをつくりました。雪原に置いて次の日も見に行くことがテーマだったので、雪でパーツをつくって置いておきました。でも、翌日にはパーツがなくなっていました。雪の塊が溶けて、雪のなかに帰ったのかなと思っただけで、タイトルは《雪に帰る》にします。

冬師湿原では一晩の気温の変化をテーマとして、2日間かけて雪のなかに「仕掛け」をすることをお題としました。天候のコンディションや現地の地形を把握した上で臨めば、安全に1日を過ごすこともできます。参加者によって、雪解け水で水彩画を制作する、アイスクリームをつくる、トレイルカメラで一晩の野生動物を収録する、コマ撮りアニメーションをつくるなどの試みがありました。ウィンタースポーツに代表されるように、古来より多様な雪遊びが存在します。外気温によって凍結する現象には、身近でありながら普遍的な驚きと不思議さがあります。同時に、自然の風景への観察力が育まれるきっかけになりうる題材でもありました。(萩原健一)

アイスクリームをつくろうと思って、防水バッグのなかに雪と塩を入れ、アイスクリームの材料を置いて放置しておきました。急冷するはずなので1～2時間でいい感じに固まったと思うのですが、一晩置いたことで溶けてしまったようです。家に帰ってから、固めて食べました。

鳥海山麓 野生めぐり

横岡のサエの神行事

横岡のサエの神行事（上郷の小正月行事）は、夏の「盆小屋行事」と同じように小屋を立てて解体する「連の仮設的な営みが継承されている。そのなかで先輩から後輩へと受け継がれる男子の文化が、かつてはあったという。「サエの神」を藁小屋に仕込み、燃やすことは、女性の神を喜ばすことだと説明を受ける。私たちの前で、燃えている藁小屋の前に立つた父と子が年齢の数だけ餅をナタで切つて折る。ホダ木と呼ばれる木の二部をナタで削つて、残った炭をつけて家に持つて帰る。子孫繁栄、身体堅固、五穀豊稔、病魔退散といった効能があるという。今は、年配の男たちが自分の子ども時代を懐古しながら祭りを維持しているけれど、すっかり少なくなった子どもたちも、そのなかにしっかりと溶け込んでいる。地域の4カ所で燃やされる藁小屋の煙の行き先から、一年の農作物の豊凶を占うのだという。

聖性と俗性、崇高と醜悪の魅惑

翌日には、石名坂のアマノハギを見学する。私たちはひとまず藁小屋に火をつけた時点で現地を訪れ、横岡と同型の行事がここでも脈々と受け継がれてきたのを確認した。その後、夕方に戻ってアマノハギ行事の準備に立ち会う。集会所に

あらゆる生命の循環を受け入れることと同じ意味を持つている。戸板をガタガタ揺らし、低く唸りながら民家を訪れ、子どもたちを恐怖に陥れるアマノハギという精霊。年長の子どもたちはそれでも、来訪者からの威圧的な問いかけに対して怖気づかず受け答えしたり、相手の正体を勘繰って「中に誰が入っているのか？」と想像をめぐらせながら、少年から青年へと成長してゆく。ここでもまた、その土地に生まれ育った子どもたちが、社会的な現実のなかで成長し、やがて祭りを執行する大人の側になってゆく「役割のバトン」が継承されていた。

真夏と真冬の夢が交錯する

夏の盆小屋でも、冬の小正月行事でも、子どもたちの自発的な集団で営まれてきた、ささやかな遊びの共同性が、この地域にとつてかけがえのない記憶の宝を形成している。大人はこの宝を受け継ぎ、次代に託そうとする。こうして、今生きている人たちの前には、膨大なかつての子どもたちのイメージが立ち上がり、真夏の夢と真冬の夢を編むように、地域の祭りを維持してゆく。鳥海山麓エリアのなかでも、にかほ市の山岳側から海側にかけて広がる海と山の境界エリアは、まさにそういうした真夏と真冬の夢が交錯する、かけがえのない地域なのだと思う。そうした集合的な夢のイメージには、かつてその地域に暮らしていた祖先の魂や、



来訪神と共に家々をめぐる

夜は「鳥追い」の行列と一緒、集落を練り歩く。子どもたちは行く先々で春の到来を予祝し、鳥が農作物を荒らす被害を象徴的に避けるための呪術を振り撒いてゆく。その力を受け取った証として、大人から子どもへ餅や菓子が贈られる。この互酬的な営みの背後には、鳥追いという農耕儀礼の実用性を超えて、ハロウィーンやサンタクロースを支えているのと同様の贈与交換の精神性、そして古代から続くユーラシア大陸の「来訪神儀礼」の普遍性が横たわっているのではないかと、私は考える。横岡では、他ならぬ子どもたち自身が「時的な「来訪神」となつて、家々をめぐるゆくのだ。

集まった後で、さっそくガレージで装束をつける集落の男性たち。男鹿半島などでいくつかの来訪神行事を見たことはあったが、石名坂のアマノハギの面は少なくとも一世紀は経つていそうな相当に古いもので、ふしくれた木のコブを角や鼻に見立ててワイルドに造形されている。暗闇のなかランプの光に浮かび上がるアマノハギの姿は聖性と俗性、崇高さと醜悪さの両方を兼ね揃えた、形容し難い魅惑を伴つて、目に見えない世界の力を体現している。

石名坂のみなさんは、この日、高校生の新たな行事の担い手がアマノハギの「中の人」になったことを喜んでた。代々の役を担うことが、ここでは男たちの文化をつくつている。祭りを継承することは、一年に一度やってくる春を味わうこと、

人間の暮らしを支えている豊かな水や農作物、海産物、畜産品などの自然環境からの贈与の精神が含まれている。海と山のあいだに広がる大地の歴史、人びとと共に生きる生物の歴史に触れ、私たちはそこで地球の歴史そのものと対面する。こうした壮大な歴史は、人間以前の時空を超えた時間の感覚と、私たちの生きる具体的な現実をつなぐフレキシブルな認識の基盤であり、自由に語り出される民間伝承や生活技術の源流でもあるだろう。これからもぜひ、夢と現実をつなぐこの地域の歴史に触れていきたいと思う。

（石倉敏明）

フィールドワーク…石倉敏明・居村匠・大東忍

移動を止めて、天体／地面／身体を観察する

「にかほでそとね」(p6-7)では新しい野外活動（アウトドアアクティビティ）の創出を試みています。2022年度は中島台レクリエーションの森や象潟海岸にて、行動前後の持ち物の変化をknollingという手法で撮影しました。冬は冬師湿原で雪のなかに「仕掛け」をすることで、時間の経過や自然との付き合い方を体感しました。野外活動がもっている固定概念に対し、美術大学生の発想を抽出することで、これまでとは異なる軸の活動可能性を探っていこうと考えています。映像作家・嶋津穂高氏による映像はまもなく公開予定。



映像作家・嶋津 穂高



にかほ市冬師地区にある冬師湿原には、鳥海山の山体崩壊でできた流れ山とハンノキが群生する湿原や溜池があります。この2日間はスノーシューでめぐりました。



冬師湿原を歩いた2日間。雪原に置いた、雪の塊。村田晴加《雪に帰る》



にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」 「にかほでそとね」萩原健一 嶋津穂高 福住廉 櫻井隆平 大平真子 木村萌 須田菜々美 出口佳弥乃 白田佐輔 堀江侑加 村田晴加 山本慎平 「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」井上宗則 石田駿太 石戸凛 友杉悠葉 長谷川由美 藤原すもも 山下暁羽 「野生めぐりにかほ版」石倉敏明 田附勝 尾花賢一 居村匠 大東忍 コーディネーター|田村剛 伊藤あさみ(NPO法人アーツセンターあきた)

「ジオカルチャー研究プロジェクト」研究レポート《手長足長》Vol.02 2023年3月発行 デザイン|上野ゆきこ 編集|高橋ともみ 撮影|田附勝 嶋津穂高 萩原健一 伊藤靖史 後藤洋平 ほか 表紙|尾花賢一 企画|公立大学法人秋田公立美術大学 制作|NPO法人アーツセンターあきた 印刷・製本|秋田活版印刷株式会社 発行|にかほ市 〒018-0192秋田県にかほ市象潟町字浜ノ田1番地 ※本紙は、にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」の一部として作成しています。 ※ジオカルチャー研究プロジェクトに関するお問い合わせ NPO法人アーツセンターあきた TEL.018-888-8137 ※本紙の無断複写・複製・引用を禁じます。